31　雲富士　林武　一面

油彩・カンヴァス　昭和四十三年（一九六八）
本紙四五・二×五二・九

画家の個性の表出が重視されるようになった大正、昭和において、林武（一八九六～一九七五）は激しい色彩の富士図を数々生み出した。とくに赤富士をよく描いたことで知られているが、本図は紫を基調とした異色の富士図である。富士の周りは、絵の具を厚く盛り上げて荒々しく描かれた雲煙が取り囲んでいる。林は「ありとあらゆる人が見て、美しいと感じるつりあいの美の、一種の見本である」（林武『美に生きる』講談社、一九六五年）と富士の美しさはその均整美にあると述べている。しかし、彼が求めたものはそうした安定した美だけではなかった。彼は次のようにも語っている。「富士山は、その均斉と安定を破るものによって、より以上の美を感じさせるのである。雲の多い日、重積する雲煙の間からその頂上がのぞくとき、中空高く天体の中の富士と見まがうばかり雄大である」（同上）。つまり、林は本図にも見られる生命を持ったかのようにうごめく雲を描きこむことで、安定のとれた富士のバランスに変化を与え、画面に躍動感をあたえようと試みていたのである。本作は、そうした画家の富士描写の信念がうかがえる作である。昭和四十八年、岸信介、佐藤栄作より秩父宮家へ新邸祝いに献上されたもの。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

富士 ―山を写し、山に想う―
三の丸尚蔵館展覧会図録No.46

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十年三月二十二日発行

© 2008.The Museum of the Imperial Collections